

論文

『希望の巡礼』のリズム ——ウィリアム・モリスの1880年代——

川端 康雄

はじめに

1880年代のウィリアム・モリス (William Morris, 1834-96) は一方で草創期のイギリスの社会主義運動を牽引し、他方、本業のモリス商会ではテキスタイル部門を主としたデザイン制作で目覚ましい成果を上げた。後者の仕事は1880年代後半に本格化するアーツ・アンド・クラフツ運動の源泉となる。この時期にイギリスで展開された政治と芸術の前衛運動の両面で彼は決定的に重要な役割を果たした。

本稿では1880年代におけるこれらのモリスの活動のうち、とくに政治的コミットメントと詩人としての仕事の関連について検討する。その際、モリスの物語詩『希望の巡礼』(*The Pilgrims of Hope*) を主要なテキストとして取り上げる。これはモリスが設立に関わった社会主義同盟 (*The Socialist League*) の機関紙『コモンウィール』(*The Commonweal*) に1885年から翌年にかけて随時連載された。1871年のパリ・コミューンに参加したイギリス人青年たちの愛と戦いを描いたこの物語詩は従来さほど注目されてこなかったが、そこには自伝的な要素を含む闘士の苦悩や希いが田園と都市を舞台に語られていて興味深い。これを頼りに、130年前のモリス自身の希望の中身をそのコンテクストとともに浮かび上がらせることができたと思う。

1885年の時代背景をまず見ておこう。イギリスでは1880年からつづいていた第二次グラッドストーン内閣がこの年の6月に総辞職し、暫定的にソールズベリーによる保守党内閣に代わったが、年末の総選挙(前年の84

年の第三次選挙法改正が適用された選挙)で自由党が勝利。86年初頭に第三次グラッドストーン内閣が組閣された。しかしこれはわずか半年の短命の内閣だった。アイルランド自治法案をめぐる自由党が内部分裂、86年夏の総選挙で自由党は保守党に敗北し、80年代の残りは保守党が(92年7月に第四次グラッドストーン内閣になるまで)政権を維持する。

1880年代は70年代以来のイギリス経済の不況のなか、未熟練労働者のみならず、熟練労働者も失業や低賃金の影響を被ったことで、労働運動において社会主義的な言説がかなりの支持を得るようになった。じっさい、ハインドマンの社会民主連盟(The Social Democratic Federation)、モリスらの社会主義同盟、シドニー・ウェッブ(Sidney Webb, 1859-1947)らのフェビアン協会(The Fabian Society)がこの年代に結成されている。

ウィリアム・モリスはこの年51歳。1880年代のモリスは本業の装飾芸術作品の制作において円熟の域に達している。同時期に政治活動に精力を注いでいたことを思い合わせると、これは驚くべきことに思える。彼の前半生は社会改良運動のたぐいには関わっていなかったもので、そのコントラストは非常に印象的だ。モリスの政治的コミットメントは1876年に東方問題に関連して開始された。当初彼は自由党急進派の立場から政治的発言と行動をおこなっていたのだが、1883年にハインドマン(Henry Mayers Hyndman, 1842-1921)の民主連盟(The Democratic Federation)に加入した。それが翌84年に社会民主連盟と改称して社会主義団体としてのカラーをはっきり打ち出したのと軌を一にしてモリスも左傾化する。マルクスの『資本論』第一巻をフランス語版で熟読したのがおそらく1883年春のことだった(デザイン方面では「イチゴ泥棒」の制作年にあたる)。そしてハインドマンの独善的な組織運営に対する反発から1884年暮れに社会民主連盟を脱退、年末に社会主義同盟を立ち上げる。1885年はこの社会主義同盟での活動に本格的に打ち込む。ハマスミスの自宅を含め、ロンドン各地、あるいはイギリス各地での集会スピーチ、講演をおこなった。また社会主義同盟の機関紙『コモンウィール』を創刊、当初は月刊だったが、まもなく週刊とする。モリスはその編集長をつとめ、1890年に辞任するまでの6年間にわたって、政局について論説文を多く寄稿し、またベルフォート・ボックス(Belfort Bax, 1854-1926)との社会主義運動史の連載記事、物語

として『ジョン・ボールの夢』(*A Dream of John Ball*, 1886-87)、また『ユートピアだより』(*News from Nowhere*, 1890)を連載することになる。後者はモリスの文学面での仕事として一般にもっとも知られる作品になったし、『ジョン・ボールの夢』も比較的良好に知られる。それに対してあまり読まれることのない韻文物語が本稿で取り上げる『希望の巡礼』である。モリスはこれを1885年から翌年にかけて同紙に不定期に連載した。

1. 『希望の巡礼』の連載(1885-86年)

『コモンウィール』の創刊は1885年2月で、『希望の巡礼』は3月号から始まっている。物語の時代設定は1871年のパリ・コミューン、すなわち1871年3月18日から5月28日に至る約2ヵ月間パリに樹立されたコミューン議会の存続中、その運動に共鳴し参加したイギリス人の夫婦(とその友人)の物語である。この物語は断続的に連載された13のパートからなる。初回の「三月の風の言づて」(*The Message of the March Wind*)は連載とは独立した詩として発表しており、当初は連載のつもりはなかったようである。だが4月号に掲載された第二回では「希望の巡礼Ⅱ——橋と街路」(*The Pilgrims of Hope. II.—The Bridge and the Street*)と題され、メインタイトルに付された脚注には「三月の風の言づて」に登場する恋人たちはすでに「民衆の大義への共感にふれており、その二人の運命を辿ってゆくことが著者の意図である」としている。また、第13回の末尾には「次回完結」(*To be concluded*)とあり、この作品が未完であったことがわかる。結局モリスはこれを完成させることはなく、生前には単行本にしなかった。ただし抒情的な「三月の風の言づて」、「母と息子」(*Mother and Son*)、それに「人生の半ばが過ぎて」(*The Half of Life Gone*)の3篇は独立した詩篇として詩集『折ふしの詩』(*Poems by the Way*, 1891)に収録している。『希望の巡礼』が初めて正式にまとまったかたちで再録されたのは1915年刊行のモリス著作集の最終巻(第24巻)においてだった。¹『コモンウィール』掲載の各回をまとめるとこうなる。

I: *The Message of the March Wind* (1885年3月号。『折ふしの詩』に収録)

- II: The Bridge and the Street (1885年4月号)
 III: Sending to the War (1885年5月号)
 IV: Mother and Son (1885年6月号。『折ふしの詩』に収録)
 V: New Birth (1885年8月号)
 VI: The New Proletarian (1885年9月号)
 VII: In Prison—and at Home (1885年11月号)
 VIII: The Half of Life Gone (1886年1月号。『折ふしの詩』に収録)
 IX: A New Friend (1886年3月号)
 X: Ready to Depart (1886年4月号)
 XI: A Glimpse of the Coming Day (1886年5月15日号)
 XII: Meeting the War-Machine (1886年6月5日号)
 XIII: The Story's Ending (1886年7月3日号)

そういう次第で初回は連載の断りはなく、単発の詩として掲載されている。田舎の春の情景と、社会変革への希望が明るく語られた詩作品としてそれなりに完結している(以下、韻文であることを考慮して『希望の巡礼』は原文を引用したあとで筆者による逐語訳を添える)。

Fair now is the springtide, now earth lies beholding
 With the eyes of a lover the face of the sun;
 Long lasteth the daylight, and hope is enfolding
 The green-growing acres with increase begun.

Now sweet, sweet it is through the land to be straying
 Mid the birds and the blossoms and the beasts of the field;
 Love mingles with love, and no evil is weighing
 On thy heart or mine, where all sorrow is healed.

(Pilgrims of Hope I, "The Message of the March Wind," sts. 1-2)
 (いまや春たけなわ、いま大地は恋人のまなざしで太陽の容かんばせをながめつつ横たわる。日は長く、希望は作物の青々と伸びる畑を抱く。／耕作地を通り、小鳥や花や野の獣たちのなかをさすらうのは心楽しい。愛と愛が混ざりあい、いかなる悪事も君の心、わたしの心をひしがず、そこではなべての哀しみが癒やされる。)

It [the March Wind] biddeth us learn all the wisdom it knoweth;

It hath found us and held us, and biddeth us hear:

For it beareth the message: “Rise up on the morrow
And go on your ways toward the doubt and the strife;
Join hope to our hope and blend sorrow with sorrow,
And seek for men’s love in the short days of life.”

(PH I, “The Message of the March Wind,” sts. 16-17)

(〔三月の風〕はわれらに告ぐ、風が知るなべての知恵を学べよと。風はわれらを見つけてとらえ、耳を傾けよと言う。／それは言づてを運び来るがゆえ。「明日立ち上がり、疑念と闘争にむけ進みゆけ、希望をわれらの希望に加え、哀しみを哀しみに混ぜ合わせたまえ、して短き命のなかで人びとの愛を求めよ」と)

『コモンウィール』に掲載された詩ということで、想定された読者層はこの機関紙を読む同志たちと、モリスが組織化したいと願う労働者たちであり、モリスが愛したコッツウォルド地方の農村を想起させるのどかな情景のなかで、社会変革にむけて連帯しようという彼らへのメッセージということになる。韻律は弱弱強格 (anapaest) の詩脚を基本とした4詩脚 (tetrameter) になっている (脚韻は abab)。おなじ韻律で書かれた第二回の最後に、初回の「三月の風」の詩を合わせて、『希望の巡礼』の連載となっている旨が注記される。

ここで『希望の巡礼』全体の粗筋を記しておく。主人公のリチャードは田舎の小村で母の手ひとつで育てられた。婚外子で、上流階級出身の父親は子どもができるのと彼女を捨て去ったが養育費だけは送っていた。リチャードは十代で母と死別するが、実父の援助を引きつづき受けて中等教育を受ける。その後指物師として修行し、職人となる。実父の死後、その遺産を管理している弁護士不正により経済援助は途絶えた。愛する女性に巡り会い結婚、社会主義運動に関わりたいという願いをもち、故郷を離れて「新たなプロレタリアート」としてロンドンに出る。そこで労働争議の現場で受ける不当な弾圧や失業、貧困の苦難の日々があり、一人の同志アーサーを得て、三人でパリに向かい、コミューンのさなか、バリケードに入って革命闘争に参加するが、敗北を喫する。妻とアーサーはバリケードで絶命し、リチャードは重傷を負うが命を取り留め、故郷の田舎にも

どって遺された息子と生きる。

——ごく大まかにまとめると以上のような筋になる。最初にわたしはこの物語詩を「パリ・コミューンに参加したイギリス人青年たちの愛と戦った描いた物語詩」と紹介したが、パリ・コミューンそのものはこの連載でなかなか出てこない。ようやく連載の最後の3回で扱われることになる。それまでは、主人公の青年の遍歴と、彼の妻となる女性の（田舎と都市ロンドンでの）希望と苦難の暮らしを描いている。主人公はしばらく名前が与えられぬままで物語が進むが、後のほうになってリチャードという名であることが明かされる。一方妻のほうは、最後まで重要な役割を果たし、第4節と第7節では彼女の一人称の語りになるにもかかわらず、名前は示されない。

その第4節（図1）は母がわが子に語り聞かせるという体裁をとっている。まだ母親の言う言葉がわからぬほどの幼子で、一人語りであるかのようだ。

Now, to thee alone will I tell it that thy mother's body is fair,
 In the guise of the country maidens who play with the sun and the air,
 Who have stood in the row of the reapers in the August afternoon, [...]
 Yea, I am fair, my firstling; if thou couldst but remember me!
 The hair that thy small hand clutcheth is a goodly sight to see;
 I am true, but my face is a snare; soft and deep are my eyes,
 And they seem for men's beguiling fulfilled with the dreams of the wise.
 Kind are my lips, and they look as though my soul had learned
 Deep things I have never heard of. (PH IV, "Mother and Son," st. 3)

（これはおまえだけに言うのだけれど、お母さんの身体からだ、田舎娘の装いで、太陽と空気と戯れ、八月の午後に収穫する人びとの列に立ったこの身体は美しい。[中略]そう、わたしは美しい、わが初子よ。おまえがこの姿を覚えていられたらいいのに。この小さな手がつかんでいるこの髪は美しい。わたしは正直者であっても、わたしの顔はひとつの罠。目は柔らかく、深く、男たちを惑わすかのように、賢き者の夢で満たされているかのように。柔らかいこのくちびるは、わたしが聞いたこともなかったような深い叡智を魂が学んでいるかのように見える。）



All literary communications should be addressed to the Editors of THE COMMONWEAL, 27 Farringdon Street, E.C. They must be accompanied by the name and address of the writer, not necessarily for publication. Rejected MSS. can only be returned if a stamped directed envelope is forwarded with them. All business communications to be addressed, the Manager of the COMMONWEAL, 27 Farringdon Street, E.C. Business communications must NOT be sent to the Editors. All remittances should be made in Postal Orders or halfpenny stamp. Subscriptions for THE COMMONWEAL, (see by post: for 12 numbers, 1 copy, 1s. 6d.; 3 copies, 4s.; 4 copies, 6s. Parcels of a dozen or a quire, if for distribution, will be sent on special terms.

TO CORRESPONDENTS.

A. MANUSCRIPTS by the Socialist League on the Russian War, has been issued. Copies will be sent to anyone on receipt of stamp for postage. NOTICE TO MEMBERS.—All papers received by the Secretary have been sorted and filed at the office of the League, and are at the disposal of members. NOTICE TO ALL SOCIALISTIC NEWSREADERS.—The Commonwealth will be regularly sent to all Socialistic Contemporaries, and it is hoped that they on their side will regularly provide the Socialist League with their papers as they may appear. MANUSCRIPTS friends can purchase this journal and other Socialist literature at the Democratic Publishing Co., 37 Tavistock Street. A. J. SMITH.—Yes, an axe belonging to a ship and dropped overboard at sea has value in the economic sense. The refuse from mines and of human labour is included in its value in the economic sense. The difficulty—a very natural and very real one at first—is in the ordinary use of the word "value" and its economic use. Parallel cases in common language and in scientific language are, e.g., "selection," "atom," "deposit." Yes, again. The measure of value in the average social time under average social conditions required to perform the labour. With the whole question of the intensification of labour we deal later on. R. WIZARD.—Your letter and our reply are held over for next number.

A P P E A L .

The Socialist League has decided to form a library of books, pamphlets, periodicals and daily newspapers, treating of and propagating the Socialist cause, for the free use and the education of its members. To this end the League appeals herewith to all members and to all friends and supporters of the great and just cause for which it fights to bestow, for this intended library, on the League as gifts such books and periodicals in their possession as treat on the Socialistic Question. All such donations received will be duly acknowledged with the sincerest thanks on behalf of the League by the designated librarians, in the official journal of the League. The League hopes that in answer to this appeal so many books will be forthcoming that a catalogue comprising numerous works can soon be issued. London, March 3, 1885. C. BENSON AND R. THEODORE.

The following additional books and pamphlets have been received for the Library of the League:—Austiguites, from M. Bery; Portugal, from English; a parcel of books, E. Seymour; a parcel of books, Lane; a parcel of books, W. Ramsey; Bebel's Woman and Graundel's Modern Socialism, from Modern Press, for review.

THE PILGRIMS OF HOPE.

IV.—MOTHER AND SON.

Now sleeps the land of houses, and dead night holds the street,
And there thou liest my baby, and sleepest soft and sweet;
My man is away for awhile, but safe and alone we lie,
And none heareth thy breath but thy mother, and the moon
looking down from the sky
On the weary waste of the town, as it looked on the grass-
edged road.
Still warm with yesterday's sun, when I left my old abode,
Hand in hand with my love, that night of all nights in the year;
When the river of love o'erflowed and drowned all doubt and
fear,
And we two were alone in the world, and once, if never again,
We knew of the secret of earth and the tale of its labour and
pain.
Lo amidst London I lift thee, and how little and light thou art,
And thou without hope or fear, thou fair and hope of my heart!
Lo here thy body beginning, O son, and thy soul and thy life;
But how will it be if thou livest, and enterest into the strife,
And in love we dwell together when the man is grown in thee,
When thy sweet speech shall harken, and yet 'twixt thee and me
Shall rise that wall of distance, that round each one doth grow,
And maketh it hard and bitter each other's thought to know.

Now, therefore, while yet thou art little and hast no thought of
thine own,
I will tell thee a word of the world, of the hope whence thou
hast grown,
Of the love that once begat thee, of the sorrow that hath made
Thy little heart of hunger, and thy hands on my bosom laid.
Thy mayst thou remember hereafter, as whiles when people say
All this hath happened before in the life of another day;
So mayst thou dimly remember this tale of thy mother's voice,
As oft in the calm of dawning I have heard the birds rejoice,
As oft I have heard the storm-wind go moaning through the
wood;
And I know that earth was speaking, and the mother's voice
was good.

Now, to thee alone will I tell it that thy mother's body is fair,
In the guise of the country maidens who play with the sun and
the air;
Who have stood in the row of the reapers in the August
afternoon,
Who have sat by the frozen water in the highday of the moon,
When the lights of the Christmas feasting were dead in the
house on the hill,
And the wild geese gone to the salt marsh had left the winter
still.
Yes, I am fair, my firstling; if thou couldst but remember me!
The hair that thy small hand clutcheth is a godly sight to
see;
I am true, but my face is a snare; soft and deep are my eyes,
And they seem for men's beguiling fulfilled with the dreams of
the wise.
Kind are my lips, and they look as though my soul had learned
Deep things I have never heard of. My face and my hands are
burned
By the lovely sun of the acres; three months of London town
And thy birch-barked brows bleached them indeed; "But lo, where
the edge of the gown."
(So said thy father one day) "parteth the wrist white as curd
From the brown of the hands that I love, bright as the wing of
a bird."

Such is thy mother, O firstling, yet strong as the maidens of old,
Whose spears and whose swords were the warders of homestead
of field and of fold.
On every foot on the highway, often they worried the grass;
From dusk unto dusk of the summer three times in a week
would I pass
To the downs from the house on the river through the waves
of the blossoming corn,
Fair then I lay down in the even, and fresh I arose on the morn,
And scarce in the noon was I weary. Ah son, in the days of
thy strife,
If thy soul could harbour a dream of the blossom of my life!
It would be as smilt meadows beheld from a tossing sea,
And thy soul should look on a vision of the peace that is to be.

Yet, yet the tears on my cheek! And what is this doth move
My heart to thy heart, beloved, save the flood of yearning love?
For fair and fierce is thy father, and soft and strange are his
eyes.
That look on the days that shall be with the hope of the brave
and the wise.
It was many a day that we laughed as over the meadows we
walked.
And many a day I hearkened and the pictures came as he talked;
It was many a day that we longed, and we lingered late at eve
Ere speech from speech was sundered, and my hand his hand
could leave.
Then I wept when I was alone, and I longed till the daylight
came;
And down the stairs I stole, and there was our housekeeping dame
(No mother of me, the foundling) kindling the fire betimes.
Ere the haymaking folk went forth to the meadows down by the
hills;
All things I saw at a glance; the quickening fire-tongues leapt
Through the crackling heap of sticks, and the sweet smoke up
from it leapt,
And close to the very hearth the low sun flooded the floor,
And the cat and her kittens played in the sun by the open door.
The garden was fair in the morning, and there in the road he
stood
Beyond the crimson daisies and the bush of southernwood.
Then side by side together through the grey-walled place we
went,
And O the fear departed, and the rest and sweet content!

図1 『コモンウィール』1885年6月号。モリス『希望の巡礼』第4回「母と息子」を掲載。

この節から韻律は弱弱強格 (anapaest) の6詩脚 (hexameter) で2行ずつ脚韻を踏む二行連句 (couplet) の詩型になる。ただし弱弱強格を基本としながら、弱強格 (iamb) が頻繁に混じるし、たまに強弱弱格 (dactyl) も入るので、そのあたり厳格ではない。しばしば6つの詩脚のうち、3つ目の詩脚が終わったところで中間休止点 (caesura) が入る。またいわゆる「女性韻」(feminine rhyme) もかなり使われる。一見したところでは英詩としては1行が長いという印象を受けることだろう。この韻律の問題については後でまたふれたい。

この女性は『ユートピアだより』の未来世界であれば、エレンという日に焼けた身体的にも知的にも活発な女性、主人公のゲストを魅了する女性となったことだろうし、また外見的にはエドワード・バーン＝ジョーンズ (Edward Burne-Jones, 1833-98) の描く女性像を想起させる。(広義の) ラファエル前派的な女性像で、「ファム・ファタール」ともなりうるタイプである。じっさい、物語中の主要な人間関係にこの「ひとつの罨」が作用することになる。社会主義の機関紙の紙面にラファエル前派的タイプが導入されている。ニコラス・サーモンが指摘しているように、ラファエル前派主義と社会主義という異種のソースの同時併用によって複雑かつ曖昧な女性像が提示されているといえるだろう (Salmon 16)。

第9節で、主人公リチャードと妻の二人のロンドンでの貧困生活にもうひとりの男性アーサーが入ってくる。この青年は裕福な家の生まれだが、社会主義の大義に共鳴し、リチャードから理論的な教えを受けてそれを熱心に吸収する。失業中のリチャードに金銭的に手をさしのべてくれる。だが親交が深まり、夫妻のあばら家に招かれて親密となるにつれて、彼はリチャードの妻に対して特別な思いをもつようになる。妻の容貌についてはいま見たとおり。たまたま政治の話をしていた際にリチャードが「裏切り」という語を口にしたとき、アーサーの顔色が変わり、リチャードはその意味を悟る。

As I spoke the word “betrayed,” my eyes met his in a glance,
And swiftly he turned away; then back with a steady gaze
He turned on me; and it seemed as when a sword-point plays

Round the sword in a battle's beginning and the coming on of strife.
 For I knew though he looked on me, he saw not me, but my wife:
 And he reddened up to the brow, and the tumult of the blood
 Nigh blinded my eyes for a while, that I scarce saw bad or good,
 Till I knew that he was arisen and had gone without a word.

(PH X, "Ready to Depart," st. 2)

(「裏切られた」という言葉を語ったときに、わたしと彼の目が一瞬合い、それから彼はすぐに目をそらした。それからまたわたしのほうをまじまじと見た。闘いの始まりに、攻撃に際して剣の切っ先を交わすかのようなようだった。だが彼はわたしを見ているようでいて、じつは妻を見ているのだということがわかった。彼は額まで顔を赤らめた。わたしは頭に血が上り、しばし周りがろくに見えなくなり、善悪の区別もつかなくなった。やがて彼は立ち上がり、一言も発せずに出て行った。)

アーサーが出て行って夫婦二人だけになると、妻が泣きながら彼に近づいてきて、しばらく二人は抱擁するが、ふたたび離ればなれになり、「刺すような激しい痛み」をたがいに感じながら無言で座している。それは「実りなき初夜の床で途方に暮れている、恋人たちのあいだに置かれた剣さながら」(As the sword 'twixt the lovers bewildered in the fruitless marriage bed)であった。

ここはモリスの伝記の多くで、モリスの妻ジェイン (Jane Morris, 1839-1914) と D・G・ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti, 1828-1882) の交際についてモリスが苦悩した間接証拠としてよく引用されるくだりである。² じっさい、パリ・コミューンが起こった1871年というのは、ケルムスコット・マナーをモリスがロセッティと共同で借りた年でもあった。その夏、モリスは妻ジェインと娘二人、それにロセッティをそこに残して、1ヶ月半のアイスランド旅行に出かけてしまう。もっとも、三角関係のテーマは初期詩篇からすでにモリスは取り上げているという事実があるわけで、実体験がそのまま反映していると見るのは単純過ぎるだろう。

それでも、「裏切り」に気付いたりチャードは、アーサーを排除するのではなく、むしろ恋敵とそして妻と相携えて、三人でパリ・コミューンの労働者たちの戦いに参入する。これまたモリス的な解決の道といえようか。パリに入った三人は革命の高揚感を実感する。

So at last from a grey stone building we saw a great flag fly,
 One colour, red and solemn 'gainst the blue of the spring-tide sky,
 And we stopped and turned to each other, and as each at each did we gaze,
 The city's hope enwrapped us with joy and great amaze.

(PH XI, "A Glimpse of the Coming Day," st. 2)

(それで、ついにグレイの石の建物から、大きな旗がはためくのを見た。赤一色で、春の季節の空の青に映えてへんぼんとひるがえっている。われわれは立ち止まり、たがいに向かい合い、たがいを見つめた。この都市の希望が喜びと大いなる驚異をもってわれわれを包んだ。)

しかし、もちろんパリ・コミューンは労働者たちの敗北、ヴェルサイユ政府軍による蜂起者たちの虐殺で終わる。弾圧者たちが使用する近代兵器(「戦争機械」)に対して蜂起者たちはなすすべもない。敵の砲弾が炸裂し、負傷者の介護の仕事でかけまわっていた妻が命を落とす。主人公は負傷で済むが、アーサーも同時にそこで死ぬ。

Both dead on one litter together, then folk who knew not us,
 But were moved by seeing the twain so fair and so piteous,
 Took them for husband and wife who were fated there to die,
 Or, it may be lover and lover indeed—but what know I?

(PH XIII, "The Story's Ending," st. 4)

(死んだ二人がひとつの担架で横たえられていたときに、われわれを知らぬ人びとは、その二人がかくも美しく、かくも哀れであるのを見て心を動かされ、二人をともに死ぬ運命であった夫婦と受け取った。あるいは恋人同士なのかもしれないと——だがわたしに何がわかるだろう。)

死んだ妻と同志アーサーを悼みつつ、苦い、複雑な心情が生き残ったりチャードによって語られている。エンディングでは、このコミューンでの敗北の経験が未来の世代に生かされるであろうという希望をもって結ばれる。

... Yet my soul is seeing the day

When those who are now but children the new generation shall be,
 And e'en in our land of commerce and the workshop over the sea,

Amid them shall spring up the story; yea the very breath of the air
 To the yearning hearts of the workers true tale of it all shall bear.
 Year after year shall men meet with the red flag over head,
 And shall call on the help of the vanquished and the kindness of the dead.

(PH XIII, “The Story’s Ending,” st. 1)

(だがわが魂は来たるべき時代を見ている。いまは子どもたちにすぎないのが、新しい世代となる未来を。そして商業の国、海外の工場であるこの国〔イギリス〕において、彼らのなかで物語が生じるであろう。そう、風の息吹そのものが労働者たちの切望する心にむけて、そのすべての真の物語を広めるだろう。年ごとに人びとは頭上に赤旗を掲げて集うだろう、そして敗北を喫した人びとの助力と死者たちのやさしさを求めることだろう。)

2. 『社会主義者のための歌』(1885年)

以上、順を追って『希望の巡礼』の大筋を追ってみたが、この物語詩をどのように評価できるだろうか。公式のモリス伝の作者マッケイル以来、これを積極的に取り上げているのは少数派といえるが、ジャック・リンジーは、これが非常に急いで書かれているものの、「強い情感が込められており、バイロンの『ドン・ジュアン』以後、19世紀の間に書かれた英国の同時代を扱った物語 (contemporary narrative) のなかで最重要の作品である」(Lindsay 308) と断言している。階級の障壁を打ち破って新たな次元の人間観を得たものとしては英語で書かれた最初の創作であり、ゴーリキーほか社会主義リアリズムの先駆者たちをも先取りしている、とまで称賛している。ジェシー・コクマノーヴァは、モリスに余裕があってこの連載版に十分な修正を加えて単行本化していたら「英語での最初の〔本格的な〕社会主義的英雄叙事詩」となっていたらと言う (Kocmanová 207)。フェミニズムと社会主義の観点からすぐれたモリス研究をおこなっているフローレンス・ブースは、主人公リチャードの展開を「創造性と革命へのコミットメントの源泉についてのモリスの十全な分析のひとつ」(Boos, “Narrative Design” 147) であると評価し、さらに女性の語りについても積極的に見ている。E・P・トムソンは、『希望の巡礼』の語彙や措辞がロマン主義のイディオムに満ちていることのマイナス面を指摘しつつも、新た

な次元の英雄的価値をこの詩が再発見していること、また女性の個性と感情的アイデンティティに敬意を払っている点でヴィクトリア朝のロマン主義の因習と袂を分かっていると述べている(672)。ニコラス・サーモンは、「三月の風の言づて」、「母と息子」そして「人生の半ばが過ぎて」といった「リアリティに影響されない切望と希望の想像世界に滑り込むことによって」詩作品として成功しているが、その反面、19世紀の労働者が置かれた苛酷な状況をリアルに描き出そうとしたくだけは一貫性に欠け不十分だと述べている(Salmon 24)。牧歌的な田園風景のなかでの希望と都市の汚穢にまみれた労働者の闘争の記録との懸隔が際立っているというのはまあそのとおりではある。

モリス自身は、友人で文学研究者のバクストン・フォーマン(J. Buxton Forman, 1842-1917)から単行本化を進められたものの、大幅な修正を要するという理由で固辞した。³ 主人公リチャードがロンドンに出て社会主義団体の集会に参加するくだりが第5節に出てくるが、その集会の様子はどう見ても1880年代半ばの社会主義同盟のそれであり、またモリスの自画像もそこには出てくる。そのあとリチャードは1871年のパリ・コミューンにおもむく。つまり明らかな時代錯誤が生じてしまうわけであり、この時系列を正すという難題に取り組む必要をモリスは認識していたが、多忙を極めていて、その修正作業に当たる時間が取れなかったのだろう。だがそのような不備があったとはいえ、韻文でパリ・コミューンに向かう「巡礼」たちの希望と不安、それに葛藤が独特なリズムで鮮やかに描き出されているように思われ、フォーマンが単行本化を願ったのも理解できる。

ここで『希望の巡礼』との関連で、モリスが1870年代後半から手がけるようになった新種の詩作について考えてみたい。それは集会や行進で歌われることを目的とした一連の詩である。その第一作となったのが1878年初めに労働者中立示威集会に際して作った「目覚めよ、ロンドンの仲間たち」だった。5連からなるバラッド詩形(普通律)による詩で、第一連はこうなっている。

Wake, London Lads, wake, bold and free!
Arise and fall to work,

Lest England's glory come to be

Bond servant to the Turk! (Qtd. in Thompson 219)

(目覚めよ、ロンドンの仲間たち、目覚めよ、大胆で自由な者たち。立ち上がり仕事にかかれ、イングランドの栄光がトルコの奴隷になり下がらないように。)

この時期モリスは自由党急進派のグループと連携し、東方問題に関してディズレイリ保守党政権の方針(ブルガリアで残虐行為を働いたトルコを支援して、ロシアと開戦する準備をしていた)に反対し、反戦を訴えていた。対ロシア戦争を歓迎する大衆レベルでの好戦的な気分というのがかなり広まっていた、それは当時のミュージック・ホールの流行歌のなかの

We don't want to fight, / But, by Jingo, if we do,

We've got the ships, we've got the men, / we've got the money too.

(俺たちや戦はご免だが、誓って言うぜ、いざとなりゃ、軍艦あるぜ、兵隊も、お宝だって不自由ねえ。)

といった好戦的な(まさに Jingoistic な)歌詞に反映されている (qtd. in Henderson 177)。モリスの詩の趣意はそうした対ロシア強硬策に対して、「ジンゴイズム」に飲み込まれないよう、反戦運動にむけて立ち上がるようにロンドンの人びとに呼びかけている。

東方問題協会の関係者から依頼されてモリスはこの「目覚めよ、ロンドンの仲間たち」を書き、それが1878年1月16日にロンドンのストランド街にあったエクセター・ホールでの集会で3千人の参加者によって斉唱された (Henderson 177-78)。ジョージアーナ・バーン＝ジョーンズによると、モリスは「見事な直感力」を発揮してその歌を「屈強の北欧人の昔の家」(The Hardy Norseman's Home of Yore)の曲に合わせて作った。「一階席にわたしたちが着くと、ホール全体でその新しい詩を刷った白いリーフレットが眼前に点々と広がり、リハーサルなしで、混乱もなく、起立している大勢の人びとによって歌われた。5連からなる詩の一連歌い終わるごとに割れんばかりの拍手喝采がわき起こった」(Burne-Jones 2: 84)。組織者の一人ヘンリー・ブロードハースト (Henry Broadhurst, 1840-1911) によれば、

「燃えるような言葉が大勢の人びとによって轟くような声で斉唱され、電流が走って体がしびれるようだった」(qtd. in MacCarthy 384)。モリス自身も妻ジェインに宛てた手紙のなかで聴衆が上手に斉唱してくれたことを伝え、「その歌声が上がるのを聞いてわたしが相当に興奮したことは君にも想像がつかだろう」(Kelvin 1: 435)と述べている。若い時期からモリスは自作品を友人や家族に朗読して聞かせることを好んだのだが、大勢の人が自分の詩を歌うというのは40代半ばにして初めての経験であった。しかも3千人という大集会での斉唱である。明らかにこの経験は詩人モリスに大きなインパクトを与えた。ひとつの目的(ここでは反戦)に賛同した人びとが一同に会して運動歌を歌う、その集団的声の強烈な響きがもつ独特な力をこの機会にモリスは認識したといえるだろう。それはエリザベス・ヘルシンガーが指摘するように、異質の、組織だっていない個々ばらばらの人間を、ひとつの「秩序だった」組織体にまとめあげる、そういう歌の力についての認識なのだった(Helsing 109)。

しばらく自由党急進派の一員として活動したのち、1880年代に入ってモリスは自由党と袂を分かち、1883年には自身が社会主義者であることを宣言する。詩人としての彼の天分(の一端)が、後半生にいたって初めて、社会主義集会で歌われる(あるいは口ずさまれる)歌の作詞に注がれることになった。「その日は来たる」(The Day Is Coming)、「主人はいらない」(No Master)、「すべて大義のため」(All for Cause)、「労働者たちの行進」(March of the Workers)といった歌がそれである。1883年から書かれた詩の7編が1885年に『社会主義者たちのための歌』と題してパンフレットとして社会主義同盟から刊行された(『希望の巡礼』の初回「五月の風の言づて」も含まれている)(図2)。これらの作詞

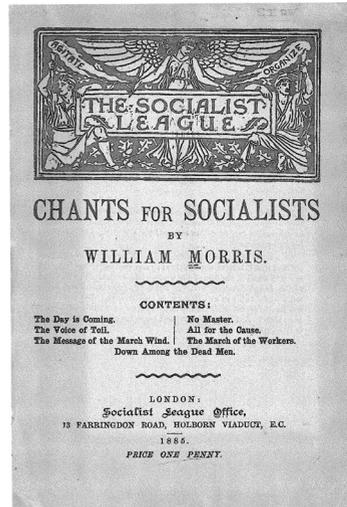


図2 モリス『社会主義者の歌』(1885年)表紙。上部はウォルター・クレイン画。

は従来の評価ではモリスの文学面での仕事としては副次的なものと思われる傾向があったが、20世紀に入ってから長く社会主義の集会や行進で歌われた詩であるという点でもっと注目されてよいように思われる。クリストファー・ウォーターズが指摘しているように、この種の歌はモリスのものが最初というわけではなく、それ以前にチャーティスト運動のなかで生まれた歌があり、それらはパイロンやシェリーらロマン派詩人の影響を多分に有する内容であった。モリスのこの方面の作品もロマン主義的な特徴をもつのではあるが、モリスの詩が描く未来像は他の作者の手になる同種の歌と比べて抽象的なイメージが少なく、労働者たちの暮らしの現状とあるべき未来の対照がより具体的に示されている。エドワード・カーペンター (Edward Carpenter, 1844-1929) 編の『労働歌集』(*Chants of Labour*, 1888) を含む、1880年代から半世紀ほどの期間にわたって刊行された社会主義運動歌のアンソロジーを概観すると、モリスの作品がかなりの頻度で掲載されていて、根強い人気を有していたことがわかる (Waters 132-33)。スペイン市民戦争に参加した英国人闘士を描いたケン・ローチ (Ken Loach, 1936-) 監督の映画『大地と自由』(*Land and Freedom*, 1995) のなかで、モリスの「その日は来たる」のなかの

Come, join in the only battle wherein no man can fail,
Where whoso fadeth and dieth, yet his deed shall still prevail.⁴
(“The Day Is Coming” 終わりから2つめのスタンザ)

(さあ、加わりたまえ、いかなる者も挫折しえぬ唯一の闘いに。そこでは人は死んで消えゆくとしても、その行為はずっと力をもちつづけるだろう。)

という詩句が引用される場面が出てくる。ローチは1930年代半ばにモリスが引用される状況が十分にあったことをふまえている。

3. 『オデュッセイア』韻文訳(1887年)とコミットメント

『希望の巡礼』の第5節で、リチャードは妻とロンドンに移り住み、指物師として働いている。そこで彼が社会主義者の集会に初めて出席した様子

が書かれている。「重苦しい汚れた部屋」に集う30名ほどの人びとは概ね倦怠感を漂わせているので、リチャードは部屋に入るや落胆する。だが議長に指名された「白髪まじりの男の名」が登壇し話を始めるとリチャードはそれに強い感銘を受ける。

He rose, thickset and short, and dressed in shabby blue,
 And even as he began it seemed as though I knew
 The thing he was going to say, though I never heard it before.
 He spoke, were it well, were it ill, as though a message he bore,
 A word that he could not refrain from many a million of men. [. . .]
 Of man without a master, and earth without a strife,
 And every soul rejoicing in the sweet and bitter of life:
 Of peace and good-will he told, and I knew that in faith he spake, [. . .]
 But they sat and made no sign, and two of the glibber kind
 Stood up to jeer and to carp his fiery words to blind. [. . .]
 He answered the sneers and the silence, so hot and eager he grew;
 But my hope full well he answered, and when he called again
 On men to band together lest they live and die in vain,
 In fear lest he should escape me, I rose ere the meeting was done,
 And gave him my name and my faith—and I was the only one.

(PH V, "New Birth," sts. 7-8)

(その男は立ち上がった。ずんぐりとした体つきで、着古した青い服をま
 とっていた。彼が話し始めようとした途端、初めて聞くというのに、何を
 話そうとしているのかわたしにはわかった気がした。その善し悪しはとも
 かく、自分には語るべきことがあるのだ、といった態度で彼は話をした。
 万人を代表して、どうしても言わずにはいられない言葉を彼は語った。[中
 略]主人のいない人間について、闘争のない大地について、人生の苦楽を
 万人が楽しんでいる世界について。平和と善意について彼は語った。信念
 をもって語っているのがわかった。[中略]だが[集まっている]人びとは
 座ったままで何の反応も示さなかった。そして軽口ばかりたたくふうな男
 が二人、立ち上がって文句をこね、彼の燃えるような言葉に水をさそうと
 した。[中略]彼は冷笑と沈黙に対して答えた。とても熱がこもってきた。
 だが彼が答えたときにわたしの希望は十分にふくらんだ。無駄に生きて死
 んでしまわぬように連帯しようではないか、と彼が呼びかけたとき、彼を
 つかまえそこなわないようにと、わたしは集会が終わる前に席を立ち、彼
 に名乗り、主義を誓った。——そうしたのはこのわたし一人。)

ここで出てくる青い服を着た人物はモリスその人にほかならず、またこの集会は社会主義同盟の集会を彷彿とさせる。前述のように、パリ・コミューンの時期にはありえない「時代錯誤」の場面として、語りの点では破綻しているわけではあるが、それでもこのくだりは1885年当時の社会主義同盟の集会の雰囲気伝えるものとして興味深い。青い服の男のアジテーションに感銘を受けて、主人公リチャードは「新たなプロレタリア」として革命後の世界を夢想する。彼にとってロンドンの町並みさえも以前よりも明るく見えてくる。

当時のモリスの日記にも綴られているように、社会主義同盟のスローガンである「教育せよ、掻き立てよ、組織せよ」(Educate, Agitate, Organise)という目標は、まさに言うは易く行うは難しで、モリスは多くの困難に直面した(Boos, *William Morris's Socialist Diary*)。モリスの次女メイ(May Morris, 1862-1938)はつぎのように当時を回想している。

それ〔1884年暮れの社会主義同盟結成〕に続く6年間はまことに語るに長い、講演と旅行と事務仕事と編集作業にあけくれた年月であったが、なかでもいちばん難しかったのは、異なった気質をもつ者たちの間に争いが起こらないようにすることであった。彼らは熱心かつ性急で、その多くは立派な志を持っていたのではあるが、互いを誤解しあう才能にかけては天下一品だったのである。〔中略〕毎週末には、父はロンドンやその周辺部で演説をした。そしてまもなく二、三ヶ月おきの地方遊説の旅を始めた。ロンドンでのおさまりの仕事だけで一週間の父の余暇時間はほとんどふさがってしまった。月曜は社会主義同盟の評議会、水曜は刊行委員会、木曜は政策委員会、金曜はハマスミス支部の会合、といった具合であった。〔中略〕これらの仕事に加えて、「機関紙販売隊」という極めつきの仕事も時々入った——この種の殉教のような仕事に不向きな人には、それは辛く屈辱的さえある仕事だった。〔中略〕日曜日はといえば、たいてい午前中は街頭集会、夜は講演会だった——遠く離れたイースト・エンドのとあるクラブの一室がしばしば会場として使われたが、そこでは半数ぐらいの者が後方でしゃべったり、酒を飲んだり、玉突きをしたりしていた。〔中略〕『コモンウィール』の告知欄を読み返すだけで、〈ロンドン砂漠〉を汽車や乗合馬車でさまよった不毛な旅の記憶が蘇ってくる。(May Morris 2: 187-89)

メイ・モリスは父親の政治運動にも協力し、集会に参加したり機関紙販売

を手伝ったりしたので、その活動に伴う苦労を実感としてわかっていた。そのときに味わった思いをおよそ半世紀後に回想したのが上記の一文である。『希望の巡礼』のなかで描かれた社会主義集会のある種の「気だるさ」もここに証言されている。「ロンドン砂漠」という表現に、メイの脳裏に刻まれたまさに砂を噛むような不毛な思いが凝縮されているといえよう。

そうした心痛を伴う社会主義活動のさなかの1886年10月29日にモリスは長女のジェニー (Jenny [Jane Alice] Morris, 1861-1935) 宛の手紙でこう書いている。

残念ながら、色々なことをしすぎてきりきり舞いの状態なので、悪いけれどあまり長く書いていられません。[中略]火曜にはランカスター、水曜にはプレストンに行きます。木曜にロンドンにもどり、できれば金曜の晩か土曜の朝にはそちら[ケルムスコット]に行きたいのだが、月曜には会議に間に合うように町[ロンドン]にもどらなければなりません。今朝は秋晴れの上天気で、とても暖かかった。マートン[アビーの仕事場]まで歩いて行きたい気がしたが、いかんせん、そうしている暇がない。『オデュッセイア』の第10歌を終わらせたところで、年内には12歌を訳し終わるでしょう。何かものを書く仕事に当たるためには、少しは痛風気味のほうがじつはわたしには都合がいいのです。『希望の巡礼』を一冊にまとめるために手直しを始める予定。ただし追加や変更箇所がたっぷりである。(Kelvin 2: 587)

『コモンウィール』での『希望の巡礼』の連載の最後が同年7月3日号であった。それから3ヵ月後の時点でその単行本化のための修正作業を考えていることがわかる。すでに見たように結局これは計画倒れに終わるが、『オデュッセイア』の英語韻文訳のほうは仕上げ、翌87年に全2巻を刊行している (*The Odyssey of Homer*)。この時期のモリスは、社会主義同盟関連の会議や『コモンウィール』誌の編集作業、論説文の執筆、それに全国各地での社会主義講演を数多くこなしていた。確認できるかぎりでは1886年に91回、97年に95回の講演と集会演説をおこなっている (LeMire 251-269)。また本業のデザイン制作と商会運営の仕事もあり、文字どおり多忙をきわめていた。どう見ても生涯で一番忙しいときで、そこにさらにホメロスを翻訳する時間をどうやって作ることができたのか、不思議なくらいだが、

日々のさまざまな仕事の合間に加え、講演のため月に何度もおこなった汽車旅行の車中、あるいは(ダブリン行き折など)船中でもかなりその作業を進めたのだった。

モリスの没後間もなくオフィシャルな伝記を執筆したJ・W・マッケイル(J. W. Mackail, 1859-1945)は本業が古典学者であり、専門家としての立場からモリスの『オデュッセイア』訳についてかなり辛辣な批判をしている。モリスが自身の訳業を「わたしの翻訳はこれまでのところ本物で、他のすべての翻訳のごとく原文を回りくどく訳したものではありません」と述べた友人宛の手紙を引いて、マッケイルは「ホメロスであれほかの大詩人であれ、逐語的に訳そうとすると、原文のなかの翻訳しえぬ性質ゆえにのみ詩的であるくだけで、どうしても平板で凡庸になるきらいがある」(Mackail 2: 181)と述べて、モリスの翻訳に難があることを示唆している。翻訳の韻文形式として6詩脚2行連句を用いたことにもマッケイルは異議を唱えている。「行の長さや動きの速度に関して[『オデュッセイア』原文の形式である]ギリシア詩の6詩脚を再現している点で立派ではあるのだが、その韻律がゆったりして変化をつけやすいという性格じたいに翻訳者は足を取られてしまいかねないのではないか」(Mackail 2: 181)と述べている。⁵ この詩型をモリスはまずアイスランド・サガに基づく自作の叙事詩『ヴォルスング族のシグルズ』(*Sigurd the Volsung*, 1876)で用いており、これについてはマッケイルは「ホメロス以後に書かれたもっともホメロスのな詩」(Mackail 1: 332)として高く評価している。⁶ だがホメロス訳のほうはこの詩型が合わないと断定しているのである。

オスカー・ワイルド(Oscar Wilde, 1854-1900)のモリス訳『オデュッセイア』評はマッケイルの辛口の評と好対照をなす。第一巻が出た直後にロンドンの夕刊紙『ペル・メル・ガゼット』(*The Pall Mall Gazette*)に寄せた書評のなかでワイルドは「わが現代詩人たちがすべてのうちで、ウィリアム・モリス氏はその資質と技量によってオデュッセウスの放浪という驚嘆すべき叙事詩をわれわれのための翻訳する資格をもっともよく備えた詩人である」(Wilde 73)と述べて、モリスの『オデュッセイア』訳から得られる喜びを表明し、その訳業を称賛している。⁷

古典学者であるマッケイルはモリスの訳業が「専門的」な手続きをふま

えてなされていないという点も問題視しているようである。なにしろ車中や船中、あるいは作業場でデザイン制作に当たっている合間などに時間をみつけて翻訳をおこなっていたわけであり、そういう状況からしてアカデミックな翻訳にはなりえない。一時期モリスの秘書をつとめたH・ハリデイ・スパーリング (Henry Halliday Sparling, 1860-1924) による以下の回想はモリスがどのように仕事をしていたのかを垣間見させてくれる。

彼はよく木炭か筆か鉛筆を手にして、イーゼルを前にして立っていたり、スケッチブックを前にして座っていたりしたものだが、そうしている間中、ホメロスのギリシア語をぶつぶつとつぶやきながら(彼の家族の表現では「マルハナバチのようにぶんぶん言いながら」、明快で思い切りのよい筆さばきでデザインを描いていった。それから、つぶやきの調子が変わった。英語の反訳が出てきたのである。このときは『オデュッセイア』を翻訳中だった。部屋をうろうろと歩き回り、ずっと詩句をつぶやきながら、パイプに煙草をつめて火をつけたり、立ち止まって複数あるイーゼルのひとつに一筆二筆描き加えたりしたかと思うと、机に向かって、やおらペンを取り、しばし猛烈な勢いで書きつづけた。20行、50行、100行、あるいはもっと多いこともあった。[中略]書く手の速度が次第に緩やかになって、彼の視線がふとイーゼルか、スケッチブックか、執筆中の何かの原稿のひとつに向けられると、今度はそちらの仕事に移っていった。そんなにたくさんの形式の異なる創作を、楽々と取っかえひっかえして、しかもびたりと前にやめた箇所から取りかかり、けっしてまごつかずに思考の脈略を取りもどすことができる。[中略]そのありさまは、傍らで見ていた青年にとってはほとんど恐ろしいほどのものだった。(Sparling 37-38)

「ワーカホリック・モリス」と呼びたくなるようなモリスの仕事ぶりであるが、ひとつひとつの仕事に向かう際の彼の集中度がいかに強かったかを印象づける。そしてモリスにとってその仕事が喜びにほかならなかったことが伺える。たとえば北部イングランドのプレストン(ディケンズの『ハード・タイムズ』のモデルとなった産業都市)に向かう汽車のなかでホメロスのギリシア語を「マルハナバチのようにぶんぶん言いながら」(bumble-beeing) 英語韻文に訳しているモリスを思い描くと、傍目には苦吟しているように見えたのかもしれないが、それはどうやら愉悦に満ちた営為で

あったらしいのである。1887年8月25日に(おそらくジョージアーナ・バーン＝ジョーンズ宛に)書いた手紙のなかでモリスはこう書いている。「わたしはいま、取り返しのつかない誤りをおかしてしまいました。なんとオデュッセイア[の翻訳]を終えてしまったのです。あとは少し清書するぐらいしか残っていません。それでかなり悲しく思っているのです」(qtd. in Mackail 2: 187)。冗談めかしつつも、『オデュッセイア』翻訳をこれ以上続けられないのを惜しんでいる。⁸ そもそも苦難にみちた漂流をへて故郷イタケに帰還する英雄オデュッセウスの物語は、社会主義運動の激務に耐える活力をモリスに与えてくれるようなものだったのではないか。

モリスの『オデュッセイア』訳を一箇所だけ見ておこう。第5巻のカリュプソの挿話の部分から。英雄オデュッセウスがオギュギア島に漂着したとき、そこに住む女神カリュプソは彼を救助し、自分の夫として島にとどまるなら不死の身にしてあげようと説得し、しばらくその島で同棲する。だがオデュッセウスは懐郷の情に堪えず、結局ゼウスのとりなしがあって出立が許される。ところが女神はまだ彼に未練があり、こう述べて残るように説く——そなたは帰国を果たすまでに大いに苦しみますよ。それを知っておれば、わたしとこの館にとどまり、不死の身になっていたものを。妻との再会を切望しておるが、姿形はわたしのほうがはるかにすぐれておるではないか。人間の女が容姿で女神にかなうはずもないのだから。それに対するオデュッセウスの返答を、以下、モリスの訳文で引用する(松平千秋訳も添える)。

Therewith all-wise Odysseus this answer forth did send:
 “Be not wroth herewith, great Goddess, for I know full certainly
 That lacking in all beside thee is the wise Penelope,
 Both in comeliness and stature and in all wise to behold;
 For she is of men that perish, and thou deathless and waxing not old.
 Nevertheless e’en so all days daylong do I yearn
 To get me back again homeward and to see my day of return.
 But if some God should wreck me as I wend o’er the wine-dark deep
 I will bear it, for in my breast an enduring heart I keep.
 Many woes and toil abundant in the war, on the wave of the sea,

Have I suffered and done already; and of these let this one be."
 So he spake, and the sun sank under, and the dark drew on apace;
 And they gat them away together in a nook of the hollow place,
 And fulfilled their love and their longing as each by each they lay.

(Morris [trans.], *The Odyssey*, Book V, ll. 214-27; CW 13: 72)

(智謀豊かなオデュッセウスはそれに答えて、「尊い女神よ、どうかそのことでわたしにお腹立ちになりませぬよう。思慮深いペネロペイアといえども、相対して見れば、その容貌も体格もあなたに劣ることは、わたし自身十分に承知しております。こちらは人間の身、あなたは不老不死の神でいらっしゃるのだから。しかしそれでもわたしはこれまでずっと、家へ帰って帰郷の日を迎えたいと思いつづけ、それを願ってきたのです。たとえ葡萄酒色の海のうえで、どなたかの神様によって難破させられようとも、艱難に負けぬ不動の心を持って耐えるつもり、すでにこれまでの波の上、干戈の間で幾多の苦難に遭い、苦しみ抜いてきたわたしです。さらにそのような難儀が重なってきたとて、なんのことがありましよう。」このようにいったが、やがて日は落ち夕闇が訪れてきた。二人はうつろな洞窟の奥へ退^{きが}って互いに寄り添い、愛の喜びに浸った。[ホメロス、上巻、138-39])

カリュプソのもとに逗留して8年目のことなので、オデュッセウスはトロイ戦争にむけてイタケから出帆した際に妻と最後に会って以来少なくとも17年は経っている。妻ペネロペイアはもう30歳代半ばか、あるいは40歳を過ぎているか。永遠の若さを誇る女神との差は広がるばかりであろう。しかも女神は「不死の身」という条件を英雄に提示する。だがその申し出にもかかわらず、オデュッセウスは死すべき人間の世界にもどる意向を女神に表明している。言い換えるなら、ここでオデュッセウスは、不断の変化をとげ、やがて老いて滅んでゆく、神々の観点からすれば「不完全」このうえない人間の生に回帰してゆこうとする意志を告げている。

ここまで書いてみると、これはモリスのロマンス(韻文、散文を含めた彼の物語作品)と重なるモチーフであることに気づかされる。アルゴナウタイの金羊毛の物語のように、あるいはもっと古くは、不死の水を求めるギルガメシュの叙事詩のように、不死への激しい渴望が物語の一定型をなしており、モリスの物語もそれを用いているが、願望充足の話にはけっしてせず、彼の主人公たちは不死への切望と死すべき定め^の断念とのあいだ

の葛藤に身を焦がしながらも、ひとつの冒険を果たしたあとで、自身の出発した地点へ、すなわち死すべき同胞たちのコミュニティへと回帰してゆく——『世界のはての泉』(*The Well at the World's End*, 1896)のラルフのように。いま見たカリュプソの挿話は、ホメロスの叙事詩が神話的テーマを媒介としながら神話からの解放を図った物語であることを示唆しており、この点でもモリスのロマンスに連なっている。そしてモリスの『オデュッセイア』韻文訳は、この叙事詩的精神(がもたらす解放感)に貫かれていると思われ、いま挙げた同時代の賛否両論で言うなら、わたしはワイルドの評に賛同したい。

おわりに

以上、1880年代半ばのモリスの仕事を『希望の巡礼』を中心として、社会主義運動のなかで歌われるための一連の詩、そして『オデュッセイア』韻文訳と合わせて見てきた。ここで強調しておきたいのは、『希望の巡礼』の大半で用いた詩型と『オデュッセイア』の訳で用いた詩型が同一で、6詩格2行連句で作られているということである。前述のように、1876年刊行の『ヴォルスング族のシングルズ』で最初に用いられた詩型(『シングルズ』韻律)であった。それが東方問題に関連してモリスが生涯で初めて政治にコミットした時期と重なるのは意味深長である。この韻律がモリスの身体的精神的リズムとなって彼のコミットメント開始後の活動パターンを作り出していたと言えるのかもしれない。⁹

ヘルシンガーはモリスの後期作品の韻律について示唆に富む指摘をしている。彼女によれば、モリスの韻律ミーターと押韻ライムの使用法は「抗しがたい律動を強調するための構造」としてであり、言語と統語法は明確さを保持しつつ反復しやすい型に配列されている。

愛読した[ウォルター]スコットの例(「最後の吟遊詩人の歌」のような物語詩)にならってモリスはまずリズムを文学形式と口承形式の境界線を再び開放するために用いた。社会主義運動に乗り出す数年前に、彼は叙事詩の語りのために普通律(common measure)を発展させた。それはハーバート・

タッカーが鋭敏に指摘しているように、行の中間と末尾の押韻のあと休止点を入れることで無音の強勢がひとつ加わる。それによって英雄6詩脚〔6詩脚2行対句〕が英国バラッドの韻律（押韻4強勢、4行連）に転じる。韻律において英国バラッドのリズムを偉大な叙事詩の重さと広がりへと溶接することは〔中略〕モリスにとって政治的意味を有していた。それは叙事詩を純然たる民衆文化的な歌の前史の一部をなすものとして回復させることである。（Helsingier 107-108）

伝承バラッドのような「普通律」の発展型として『シゲルズ』、『希望の巡礼』、また『オデュッセイア』訳のリズムがもたらされているという興味深い指摘がここでなされている。

『希望の巡礼』の連載中であつた1886年2月にモリスは『ペル・メル・ガゼット』の「良書百選」(the Best Hundred Books)のアンケートに回答を寄せた。そこで彼はホメロス、ヘシオドス、『エッダ』、『ベーオウルフ』、『カレワラ』、『シャー・ナーメ』、『マハーバーラタ』などを挙げたうえで、これらを「マツィーニが『バイブル』と呼ぶ類の書物群」とであると注記している。

これらは必ずしも文学的基準によって評価できるものではないが、わたしにはいかなる文学よりもはるかに重要なもの。これらは、いかなる意味でも、一個人の作品なのではなく、民衆の心そのものから生まれ出たものなのだ。（CW 22: xiii）

そう述べたうえで、モリスはそうした「バイブル」の本性を分ち持つ書物のなかに、「デンマーク、およびスコットランド・イングランド辺境地方の伝承バラッド」(The Danish and Scotch-English border Ballads)を加えている（CW 22: xix）。「民衆の心そのものから生まれ出た」という一点でホメロスと伝承バラッドが同次元でとらえられている。彼が用いた韻文形式はそうしたモリスの志向の入れ物であつたと見るができるだろう。『社会主義者のための歌』に収録された「その日は来たる」冒頭の

Come hither, lads, and hearken, for a tale there is to tell,
Of the wonderful days a-coming, when all shall be better than well.

(Morris “The Day Is Coming” st. 1)

(さあ、仲間たち、ここに来たりて聞きたまえ、話がある。すべてが見違えるほどよくなる、素晴らしき未来の話だ。)

の対句を例に挙げて、コクマノーヴァが『『シグルズ』韻律を『民衆的』な街頭バラッドに似せたもの』(a “popular,” street ballad-like version of the “Sigurd” metre) と評したのは言い得て妙であった (Kocmanová 189)。そして『希望の巡礼』でもモリスは『『シグルズ』韻律』をバラッドの世界に接続しようと模索していたことが見て取れる。

モリスが1880年代におこなった詩人としての重要な仕事は、確かに「純然たる民衆文化的な歌」の創出にむけて寄与することであったのだろう。『希望の巡礼』はその願いを込めた詩作としてモリスの文学上の仕事のなかで独特かつ重要な位置を占める作品だと評価できる。

- * 本稿は日本ヴィクトリア朝文化研究会第15回大会(2015年11月21日、於同志社大学今出川キャンパス)での特別講演の原稿に大幅な加筆修正を施したものである。

注

- 1 ちなみに、モリスの文学作品の普及版が没後も1920年ぐらいまではいくつかの版で流通していた。ラインナップがもっとも豊富だったのはロングマンズ・グリーン社であり、『希望の巡礼』も“Chants for Socialists”他の社会主義的な詩と併せて1915年に2シリングのポケット版で出ていて、比較的よくよく読まれていたことが伺える。上述のようにモリス生前には単行本にまとめられなかったのだが、1915年に著作集最終巻が出たことで、普及版の要請が出て刊行に至った。
- 2 Henderson 291-292 を参照。
- 3 ただしフォーマンは連載分を無修正のまままとめて1886年に私家版で刊行している。Forman 125 を参照。
- 4 この詩も6詩脚2行連句であることに注意したい。『社会主義者のための歌』に収録された詩のなかでは他に「すべて大義のため」もおなじ詩型で書かれている。
- 5 ホメロスの叙事詩で(またウェルギリウスの『アエネイス』など他の古典叙事詩で)用いられているヘクサメトロンは dactylic hexameter (長短短格6詩脚)

で、長短短格 (dactyl) を基本に長長格 (spondee) を併用したりズムで構成される (最後の第6詩脚のみ長長格か長短格)。通常押韻はしない。古典叙事詩の韻律が音の長短の組み合わせでできているのに対して英詩の韻律は強弱アクセントのパターンに基づくという根本的な相違があるが、英詩のもつ制約のなかでモリスはホメロスのヘクサメトロンを極力「再現」しようとしていたことをここでマッケイルは指摘している。

- 6 6詩脚2行連句 (hexametric couplet) をモリスが初めて用いたのは1876年刊行の『ヴォルスング族のシグルズ』であり、そこから『『シグルズ』韻律』(the “Sigurd” meter) という名称も使われているのだが、6詩脚の最初の使用例は1871年のアイスランド旅行の経験を回想した「アイスランドを初めて見て」(Iceland First Seen) だったと思われる。6連からなるこの詩の初出は1891年刊行の『折ふしの詩』においてだが、この詩の執筆時期は不詳。この詩では1連が7行からなり、ababaccと脚韻を踏む。

『『シグルズ』韻律』について、コクマノーヴァの説明に従ってさらに補足しておく、これは前述のように弱弱強 (anapaest) のほかに弱強 (iamb)、また強弱弱 (dactyl) なども混在した詩脚からなり、リズムに変化をもたらすための主要な技法として、1行の前半と後半とで (詩脚の最後の音節に強勢を置く) 上昇韻律 (rising rhythm) と (詩脚の第1音節に連続して強勢を置く) 下降韻律 (falling rhythm) を交互に繰り返すやり方が時折用いられる。中間休止点 (caesura) の直前で強勢のない音節過多の詩脚もよく使われる (Kocmanová 137)。グリアソンとスミスは英詩のなかではユニークなこの「足を踏みならして歩くような韻律」(a trampling measure) を「モリス自身の考案」であるとしたうえで、「これはわれわれの北方の言語〔英語〕が可能なかぎり、ホメロスの長短短格6詩脚 (dactylic hexameter) の代用として最善の詩型であるのかもしれない」と述べている (Grierson and Smith 424)。

- 7 ワイルドの書評はさらにこうつづく。「なにしろ〔モリス〕氏はチャーサー以来のわれわれの唯一の本物の語り部だからだ。氏が社会主義者だとしても、サガを語る人物でもある。そして神々や人々の不思議な伝説を、騎士道とロマンスの驚嘆すべき物語をわれわれに語って決して倦むことがなかった時代が氏にはあった。装飾的・叙事的韻文の名人なので、事物の目に見える相におけるギリシア人の喜びのすべてを、繊細で喜ばしい細部へのギリシア人の感覚のすべてを、美しい肌理と霊妙な素材、そして想像力に富む意匠へのギリシア人の喜びのすべてを氏は備えている。さまざまな技芸における労働者、職人たち——白い象牙に彩色する絵師や、紫糸や金糸を用いる刺繍師から、織機に向かう職工、染槽に布を浸す染職人、楯や兜をてがける彫金師、木彫・石彫の職人に至る、あらゆる職人たちへのホメロスの称賛について、氏ほど強い共感の念を抱いている人はほかにいない。

そしてこのすべてに加わるのが、高次のロマンスの真の気質、過去をわれわれにとって現在とおなじようにリアルにする力、情熱を見分ける靈妙な本能、生を描きだすすばやい衝動、これである」(Wilde 73)。

- 8 メイ・モリスによれば、『オデュッセイア』を訳し終えてからモリスは引きつづき『イリアス』を訳す計画ももっていたようだが、200行ほどの粗訳がノートブックに残っているだけで、それ以上は進められなかった(CW 13: xiv)。
- 9 おなじ詩型をモリスは1888年刊行の『ウルフィング族の家の物語』(*A Tale of the House of the Wolfings*)でも援用している。これは後期散文ロマンスのひとつに数えられているが、本文中で主要人物のウッド=サンヤシオドルフらの台詞で韻文が併用されている。さらに古英語の叙事詩『ベオウルフ』(*Beowulf*)の英語韻文訳(1895年)で用いているのもおなじ詩型であった。

引用文献

- Boos, Florence S. "Narrative Design in *The Pilgrims of Hope*." Florence S. Boos and Carole G. Silver, ed. *Socialism and the Literary Artistry of William Morris*. Columbia, Mis.: U of Missouri P, 1990. 147-66.
- , ed. *William Morris's Socialist Diary*. London: Journeyman, 1982.
- Burne-Jones, Georgiana. *Memorials of Edward Burne-Jones*. 2 vols. London: Macmillan, 1904.
- Forman, H. Buxton. *The Books of William Morris*. London: F. Hollings, 1897.
- Grierson, Herbert, and J. C. Smith. *A Critical History of English Poetry*. 2nd ed. London: Chatto & Windus, 1947.
- Helsing, Elizabeth. "Telling Time: Song's Rhythms in Morris's Late Work." Michelle Weinroth and Paul Leduc Browne, ed. *To Build a Shadowy Isle of Bliss: William Morris's Radicalism and the Embodiment of Dreams*. Montreal: McGill-Queen's UP, 2015. 106-23, 309-13.
- Henderson, Philip. *William Morris: His Life, Work and Friends*. London: Thames and Hudson, 1967. [フィリップ・ヘンダースン『ウィリアム・モリス伝』川端康雄ほか訳、晶文社、1990年]
- Kelvin, Norman, ed. *The Collected Letters of William Morris*. 4 vols. Princeton, NJ: Princeton UP, 1984-96.
- Kocmanová, Jessie. *The Poetic Maturing of William Morris: From The Earthly Paradise to The Pilgrims of Hope*. Praha: Státní Pedagogické Nakladatelství, 1964.
- LeMire, Eugene D., ed. *The Unpublished Lectures of William Morris*. Detroit: Wayne State UP, 1969.

- Lindsay, Jack. *William Morris: His Life and Work*. New York: Taplinger, 1979.
- MacCarthy, Fiona. *William Morris: A Life for Our Time*. London: Faber, 1994.
- Mackail, J. W. *The Life of William Morris*. 2 vols. London: Longmans, 1898.
- Morris, May. *William Morris: Artist Writer Socialist*. 2 vols. Oxford: Basil Blackwell, 1936.
- Morris, William. *Chants for Socialists*. London: Socialist League, 1885.
- . *The Collected Works of William Morris*. 24 vols. Ed. May Morris. London: Longmans, 1910-15. [CW]
- . *The Pilgrims of Hope and Chants for Socialists*. London: Longmans, 1915.
- . *Poems by the Way*. London: Reeves and Turner, 1891.
- , trans. *The Odyssey of Homer*. 2 vols. London: Reeves and Turner, 1887.
- Salmon, Nicholas. “The Serialisation of *The Pilgrims of Hope*.” *The Journal of the William Morris Society* 12.2 (Spring 1997): 14-25.
- Sparling, H. H. *The Kelmscott Press and William Morris, Master Craftsman*. London: Macmillan, 1924.
- Thompson, E. P. *William Morris: Romantic to Revolutionary*. 2nd ed. New York: Merlin, 1977.
- Wilde, Oscar. “Mr. Morris’s Odyssey.” *The Artist as Critic: Critical Writings of Oscar Wilde*. Ed. Richard Ellmann. Chicago: U of Chicago P, 1982. 73-76.
- ホメロス『オデュッセイア』上下、松平千秋訳、岩波書店、1994年。
 ——日本女子大学教授・本学会会長

Summary

The Rhythm of *The Pilgrims of Hope*: William Morris in the 1880s

Yasuo Kawabata

The Pilgrims of Hope (1885-86), an unfinished set of poems by William Morris (1834-96), narrates the story of a young British socialist and his wife, who participate in the Paris Commune of 1871 and, with other Communards, suffer a defeat at the hands of French government troops. It was serialised in *The Commonweal*, the official organ of the Socialist League, of which he was one of the founding members. Being both his first major socialist work, followed by *A Dream of John Ball* (1886-87) and *News from Nowhere* (1890), and his last longer narrative in verse after *Sigurd the Volsung* (1876), it has never been popular among the reading public and, with some exceptions, rarely seriously argued by critics. I maintain, however, that the work is of vital importance in that it marks a distinct stage in Morris's career as a poet, when he sought to make socialist epical and lyrical poems with a flavour of popular ballads.

In evaluating *The Pilgrims of Hope*, I have referred to a series of poems Morris wrote from 1878 onwards to be sung or recited at the political meetings and demonstrations, as well as to his translation of the *Odyssey* (1887). Apparently these two genres—the socialist poetry and the Homeric epic—seem mutually incompatible, but close examination reveals that both bear significant relevance to each other. Quite a few poems of the former, such as “The Day Is Coming” and “All for the Cause” included in *Chants for Socialists* (1886), are written with the same “Sigurd” metre—heroic hexameter couplets—used for his rendition of the *Odyssey*. It is also the metre used in all but the first two

sections (sections 3 to 13) of *The Pilgrims of Hope*. The socialist epic, with lines of six beats in rising rhythm, could be seen as Morris's endeavour in the 1880s to compose poetry linked to the kind of books which, as he wrote in 1886, "are in no sense the work of individuals, but have grown up from the very hearts of the people."